

三啓集に収められたサウンダラナンダの異読について*

田 中 裕 成

1. はじめに

『サウンダラナンダ』（以下 SauN）は馬鳴が著したとされる全十八章から成るカーヴィヤ作品であり、釈尊の異母兄弟であるナンダの出家譚である¹⁾。特に十一章からの後半部分はナンダが実際に阿羅漢果を獲得するまでの過程がありありと描かれている。そして、そこには教学的な記述が多く認められる。松濤 [1954] はそのような記述を分析し、馬鳴を瑜伽行派の祖と位置づけた。その後、本庄 [1987] は経部との関係性から SauN を分析し、本書が経部の修行体系を述べる論書として見れる可能性を指摘した²⁾。迦膩色加王伝の記述に基づき馬鳴を二世紀半ばの人物とするならば³⁾、本書は現存する修行体系を説く論書群の中でも古層のものであり重要な資料であると言えよう。

そのような中、Hartmann [1988] は 2-3 世紀のものと推定される中央アジ

* 本稿は2019年の印度学仏教学会のパネル発表「アシュヴァゴーシャ研究の展開（研究代表 松田和信）」にて、「サウンダラナンダの思想的背景— Johnston 本と中亜・三啓集本—」として発表した内容、ならびに2019年の佛教大学仏教学会講演内容をもとに、『三啓集』本『サウンダラナンダ』に焦点を当てて整理したものである。

- 1) 『サウンダラナンダ』に対する先行研究については岡野潔氏のホームページに詳しく紹介されている。詳細についてはそちらを参照されたい。<http://gdgdgd.g.dgdg.jp/saundara.html>
- 2) 四諦説については本庄 [1987] がすでに、「苦諦は名色（SauN 16. 16）、集諦は渴愛などの過失の群れ（SauN 16. 17）、滅諦はその滅（SauN 16. 25）、道諦は慧と寂靜（SauN 16. 30）」と分析している。
- 3) 従来の研究では迦膩色加王伝に基づき、馬鳴を迦膩色加王の時代の人物とみなす傾向にある。SauN は『チャラカ・サンヒター』の影響下にあることから、当該の伝記の記述は信憑性があるものと考えられる（Cf. 田中 [2019c]）。

ア出土の写本断片 SHT 921⁴⁾ (以下、中央アジア写本と称す) が当該の SauN の四諦説の一部 (SauN 16. 21-33) であると同定した。そして、八正道における正精進の扱いについて、Johnston [1928] が基づいたネパール写本と異なる読みがあることを指摘した (以下、Johnston [1928] はネパール写本と称す)⁵⁾。Hartmann [1988] の発見を受けて、Salomon [1999] は両写本間に思想的に明確な差異があり、ネパール写本の正統性に危うさのあることを指摘した。また、それに続き、Choi [2010] は、ネパール写本の正精進の扱いは有部の経典 (「法施比丘尼経」等) と対応し、中央アジア写本の扱いは南伝ニカーヤ (MN 44. (Vol 1, p. 301)) と対応することから、ネパール写本が古説を保っているかについて疑問があり、馬鳴が必ずしも有部所属とは言い切れないと述べている⁶⁾。

さて、SauN には漢訳やチベット訳が存在しないものの、松濤 [1954] や、Hartmann [1988]、菅野 [1994, 1995, 1998, 2002]、上野 [2015] によって、鳩摩羅什訳出資料中に多くの馬鳴詩が見出されることが指摘されており、SauN に関してもこれらの研究によって40偈程回収されていた。

その中、筆者は、田中 [2019a] において、『禅法要解』中に問題の四諦の記述 (SauN 16. 6-40) を発見し、対応箇所の中、先行研究で最も問題詩されている SauN の道諦と八正道の関係 (SauN 16. 30-33) に注目し、(I)正精進の位置付け(II)30偈 c 句の主語の数(III)偈の順序という 3つの観点から分析を行った。その結果、中央アジア写本と『禅法要解』所引の SauN がよく対応することが明らかとなり、両者の読みが SauN の原意に近く、ネパール写本の読みは SauN の原意から離れ、有部の教学的な解釈と対応するように改変されている可能性を指摘した。また、田中 [2019d] において『禅法要解』の当該箇所の訳と対応する SauN の対応箇所を示した。

4) Waldschmidt [1971]

5) なお、当該箇所の写本を同定した Hartmann [1988] は30-33偈がネパール写本と違うことを指摘するが、その理由については特に言及していない (Cf. Hartmann [1988, p. 68])。

6) Choi [2010] は有部の経典との対応関係から馬鳴が有部所属と言い切れないと述べる。しかしながら、有部と経部が完全に一言一句同一の三蔵を持っていなかったことは櫻部

このように、漢訳文献中の馬鳴詩に注目が集まっている中、松田和信氏により新たな梵文馬鳴文献である『三啓集』が再発見され、その内容が2019年の印度学仏教学会のパネル発表「三啓集 (*Tridaṇḍamāla*) を彩る40經典とアシュヴァゴーシャの詩作品」等において報告された⁷⁾。そして、この『三啓集』には偶然にも田中 [2019a] で取り上げた SauN 十六章中の四諦の説示の殆どが収められていた⁸⁾。この『三啓集』所集の SauN (以下、『三啓集』本と呼称する) であるが、現時点で確認できる諸本に対して、大小様々な異読が多岐に渡る⁹⁾。そこで、本稿では、まず、『三啓集』所収 SauN に見られる一般的な異読と、田中 [2019a] で確認した教義的背景を有する異読の二系統の異読を確認し、『三啓集』本 SauN の再発見が今後の SauN 研究に与える影響について考察したい¹⁰⁾。

[1969, pp. 35-40] や本庄 [2014ab] によってすでに指摘されている。例えば、櫻部 [1969, pp. 35-40] は有部と經部で違う保持した經典の語句に異なりがある点として、『俱舍論』定品の議論を挙げる。そこでは、有部正統派は樂受は身・心の両者にあるとするが、經部は「身」の語は有部が加筆したものであり、本来は心受のみであると主張する (Cf. AKBh 439, 1; 小谷・本庄 [2004, p. 247]; AKUp 8018, 2008)。また本庄 [2014ab] は櫻部の指摘と同様に、文言が対応しない經典 (AKUp 6003) や、正統有部が教証として引用するも經部では認められていない經典 (AKUp 1011) を挙げる。このように有部と經部では所依の經典は大凡で対応するとしても完全に対応するわけではない。また、論に関しても經部では有部が所持していたような論を論として認めず、『決定義經』等を論とする と述べる (Cf. 本庄 [1989, p. 5], AKVy 11)。

7) その内容については、松田 [2019] を参照。

8) 『三啓集』に田中 [2019a] であつかった箇所が収められていることについては、松田和信氏よりご教示いただいた。また、当該箇所を読みすすめる際には様々な点からご教示を受けた。この場に記して謝意を示す。

9) また、本写本においては多くの誤写と思われる記述が確認されるが、それらの多くは、本写本の書体とは異なる書体で修正が加えられている。おそらくは、本写本を使用した人物の修正であるが、それらの修正はネパール写本などの諸本と対応し、適切な修正であると言えよう。この修正者であるが、松田 [2019] はアティーシャである可能性を示唆している。

10) 『三啓集』本 SauN の全体象については機を改めて公開する予定である。

2. 『三啓集』本 SauN の異読について

2.1. 一般的な異読

まず、一般的な異読について紹介したい。いわゆる、単語こそ異なるもののどちらにせよ意味や韻律が通り、教義的な差異を見いだせないものである。この類の異読について、一部を例示し、『三啓集』本が保持する異読について評価してみたい。

まず一つ目の異読例は『三啓集』本が用例に適う例である。次の通りである。

yaj janma dehasya(J: rūpasya) hi sendri {r} yasya
duḥkhasya tan naikavidhasya janma |
yas sambhavaś cā○sya samucchrayasya
mrtyoś ca [rogasya ca sambhavas sa]ḥ | (SauN.16.8)

行者應念老病死等一切苦惱皆由有身¹¹⁾。

何故なら、感官を有する肉体 (rūpa or deha) の誕生が、種々の苦しみの誕生であり、その成長の生起、それこそが死と病との生起であるからである。

ここでの異読は rūpa と deha である。ともに身体を示す語であり、漢訳でも「身」となっており、どちらと対応するのか明白ではない。ただ、SauN では心身二元論を述べる際には身体を deha と表現することが多く¹²⁾、rūpa は容貌の美貌さを示す語として用いられる傾向にある¹³⁾。特に SauN 9.5では rūpa が容貌の美貌さを示す語として用いられ、続く SauN 9.6ではそのそれらの所依となる身体を deha として表現し、rūpa と deha を意図的に区別している顕著な例

11) 『禪法要解』[T. 15.294b4-5]

12) 一例を上げれば、SauN 8.3, 9.6, 15.58等が挙げられる。また、śarīra と cetas の2つによって表現する用例も SauN 16.11-12等多く見られる。

13) 一例を上げれば、SauN 9.4-5 等が挙げられる。ただ、五蘊や名色といった術語を用いる際にはこの限りではない。

と言えよう。つまり、rūpa を採用するネパール写本よりは、deha を採用する『三啓集』本のほうが SauN の単語の用例と噛み合い、適切であると言えよう。つまり、一見して他愛もない異読であるが、当該の異読は SauN の用例に基づけば、『三啓集』本が適切な読みを保持している例と言えよう。

続いて2つ目の異読例はネパール写本と漢訳が呼応する例である。次の通りである。

sa[d vā]py asad vā viṣamiśrayam annam*
yathā vin[ā]śāya na dhā[96b4]raṇāyā |
loke tathā tiryag upary adho vā
duḥkhāya nityam*(J: sarvaṃ) na sukhāya janma || (SauN 16.9)

十方衆生所以有身。皆爲受苦故生。譬如毒食。若好若醜皆爲殺人¹⁴⁾。
善いものであっても、悪いものであっても、毒の混じった食べ物は、死を結果し、持続を結果としないように、
そのように、四方や上下、世間における、誕生は、「常に or 全て」苦を結果し、楽を結果としない。

ここでの異読は nityam と sarvaṃ である。どちらも誕生が完全に苦であることを示す語として用いられており、両者に思想上の重要な差異は見いだせない。ただ、こちらに関しては漢訳を参照すれば、「皆爲受苦故生」として「皆」という sarva 相当句が見い出せ、ネパール写本と漢訳が呼応する。

続いて3つ目の異読例は『三啓集』本と漢訳が呼応する例である。次の通りである。

jarādayo naikavidhāḥ pra○jānāṃ
satyāṃ pravṛttau prabhavanty anarthāḥ |
pravātsu ghoreṣv api māruteṣu

14) 『禪法要解』[T.15.294b6-7]

na hy aprasūtās taravaḥ patanti (J: calanti) |(SauN 16.10)

若無身心者。老病死苦則無所寄。如惡風摧折大樹。若無樹者則無所壞¹⁵⁾。
転生が存在する時、人々には老い等の種々の不利益が生ずる。
何故なら、恐ろしい風が吹いている時であっても、未だ生じていない木々
は「倒れない or 揺れない」からである。

ついで、三つ目（第十偈）は patanti と calanti であり、意味の上ではどちらも木が害されることが表現されており、思想上の重要な差異は見いだせない。先程と同様に漢訳を参照すれば「如惡風摧折大樹。若無樹者則無所壞」となっており、「木を折るほどの風が吹いても木がなければ破壊されるものはない」として、揺れるだけではなく切り倒すといった意味が見い出せ、こちらは『三啓集』本の読みと漢訳が呼応する。

続いて4つ目の異読例は、『三啓集』本と、漢訳、中央アジア写本が呼応する例である。次の通りである。

ro[97a4]śādhike(J: doṣā-, H: ro[śā]-) janmani tīvraroṣa (J:-doṣa, H: -roṣa)

utpadyate rāgiṇi tīvraṛāg{e}aḥ (|)

mohādhike mohabalādhikaś ca {}

tadalpado○ṣe ca tadalpadoṣaḥ |(SauN 16.22)

如多欲者受多欲形。多瞋恚者受多瞋恚形。多癡者受多癡形。煩惱薄者受薄煩惱形¹⁶⁾。

強力な瞋恚 or 過失を有する者が誕生する時、強力な瞋恚 or 過失を有する者が〔生まれ〕、貪欲を有する者が〔誕生〕する時、強い貪欲を有する者が生まれ、強力な冥闇を有する者が〔誕生〕する時、冥闇の力の強力な者が〔生まれる〕。それらの過失（過失）の少ない者が〔誕生〕する時、それらの過失の少ない者が〔生まれる〕。

15) 『禅法要解』[T.15.294b7-9]

16) 『禅法要解』[T.15.294b27-29]

ここでは、ネパール写本では *doṣa* となっている箇所が、中央アジア写本¹⁷⁾では *roṣa* となっており、漢訳でも瞋恚となっており、文脈においても貪瞋癡の三毒が意図されており、複数方面から *roṣa* が支持される。おそらくは *ro* を *do* と誤写したものの、文章としては読めてしまうために看過されてしまったのであろう。

以上、一般的な異読として四種類の例を見た。いずれにおいても思想的差異を有するものではなく、さして重要なものではなかった。しかし、いずれかの諸本が常に対応するというわけではなかった。つまり、いずれかの写本が常に正しいというわけでもないということが見て取れた。

2.2. 教義的背景の異なりに基づく異読

さて、次に、思想的背景に基づく異読についてみてみたい。先にも述べたように、田中 [2019a] では、『禅法要解』所収の *SauN* と中央アジア写本とネパール写本の異読を取り上げ、分析、検討を行い、いくつかの異読には思想的背景の異なりに基づくものがある可能性を示した。そこで、(I)正精進の位置付け、(II)30偈 *c* 句の主語の数の二点について田中 [2019a] の見解をなぞりつつ、それと『三啓集』所収 *SauN* がどのように対応するか確認したい¹⁸⁾。

2.2.1. 『三啓集』本の読み

さて、問題と成る『三啓集』本 *SauN* 16. 30-33は次の通りである。

(なお、煩雑となることを恐れて、本文においては『三啓集』本 *SauN* とその訳を示すにとどめた。それぞれの対応関係については本稿末に対照表を付したので、そちらを参照。)

17) 中央アジア写本の全貌は次の通りである (Cf. Hartmann [1988])。

ro[ṣā](dhike janmani tī)[vr](a)roṣa [u]tpadyat[e] rāgi[ni tī]vraṛāgah
mohādh[i]k[e] mohabal[ā](dhikaś ca tadalpadoṣe ca tadalpado)[ṣah] 2[2]

18) 偈の順序に関しては『三啓集』所収 *SauN* では戒蘊を巡る偈が写本の枠外に書かれており、順序の判断をつけることができず、今は取り置く。

asyābyupāyo 'dhigamāya mārggaḥ {}
prajñ[ā]○(d)vikalpa{h} praśama{s?}trikalpaḥ |
tau bhāvanīyāu vidhivad budhena
śīle śucau tripramukhe sthitena | |(SauN 16.30)
vākkarmma samya○k sahakāyakarmma
yathāvad ā[jī]vanayaś ca śuddaḥ |
idaṃ tra[ya]ṃ vṛt(t)ividhau pravṛttam*
ś[ī]lāśrayam* karmmapari[97b3]grahāya | |(SauN 16.31)
nyāyena satyādhigamāya yuktāḥ
smṛtiḥ samādhiś ca parākramaś ca (|)
idaṃ trayam [yoga]vidhau pravṛttam <MS. praddiṣtam>
śamāśrayam cittaparigrahāya (| |)(SauN 16.32 ?)
satyeṣu duḥkhādiṣu dṛṣṭir ā[r]yā
teṣv eva samyagniyato vitarkaḥ
idaṃ dvayam jñānavidhau {jñā}○{na vidhau} pravṛttam*
prajñāśrayam kleśaparikṣayāya | |(SauN 16.33)

そ〔の滅〕に至るものが、学習のための道である。〔すなわち、〕(I)二種の慧であり、三種の寂静である。(II)両者（tau; 慧と寂静）は規則通りに賢き者にして、三面からなる清浄な戒に住する者によって修習されるべきである（bhāvanīyau）。

正しい語業（正語）と、俱生の〔正しい〕身業（正業）と、正しく、清らかな生活手段（正命）。これら三つは、行動規範に基づく活動であり、戒を所依とし、業の補助を結果する。

理を用いて、〔四〕諦を学ぶために相応しい、正しい念と正しい三昧と正しい努力、これら三つは瑜伽の規範に基づく活動であり、寂静を所依として、心の補助を結果する。

苦等の〔四〕諦に対する聖なる見、〔聖なる見で見られた〕そのおなじ〔四諦〕に対する正しく決定した思惟。この二つは、智慧の規範に基づく活動であり、煩悩を完全に滅する為の慧の所依である。

以上が『三啓集』本 SauN 16. 30-33である。以下においては田中 [2019a] における指摘を確認した上で、『三啓集』所収本の関係を分析してみたい。

2.2.2. 正精進の位置付け

まず、(I)「正精進の位置付け」に対する田中 [2019a] の分析を確認したい。SauN 16. 30-33では八正道は戒定慧の三蘊にまとめられるとする。その際に、正精進の位置付けがネパール写本と中央アジア写本では異なる。いまいちど、整理すれば次の通りである。

	ネパール写本	中央アジア写本
戒蘊所撰	正語・正業・正命	正語・正業・正命
定蘊所撰	正定・正念	正定・正念・正精進
慧蘊所撰	正見・正思惟・正精進	正見・正思惟

この点について先行研究では、Salomon [1999] はネパール写本の正当性の危うさを指摘し、Choi [2010] は経論を検討して、ネパール写本の読みは有部の「法施比丘尼経」¹⁹⁾や『俱舍論』²⁰⁾などの記述と対応し、中央アジア写本の読みは南伝の中部の経典²¹⁾と一致することを指摘し、馬鳴の所属部派が有部ではない可能性を指摘する。

さて、今回新たに回収された『禅法要解』の SauN 対応箇所では、30偈相当

19) AKUp 1005 [Ju7b5- 6] Cf. 本庄 [2014a, pp. 65-66]

ཆོང་ལྷན་པ་སྐད་ལྟར་ཡང་དག་པའི་དག་དང་། ཡང་དག་པའི་ལས་ཀྱི་མཐའ་དང་། ཡང་དག་པའི་འཛོལ་དག་ནི་བཅོམ་ཞུན་འདས་ཀྱིས་ཚུལ་ཁྲིམས་ཀྱི་ཕུང་པོར་བཤད་དོ། །གང་ཡང་ཡང་དག་པའི་བྲན་པ་དང་། ཡང་དག་པའི་ཉིང་ཇེ་འཛིན་ནི་བཅོམ་ཞུན་འདས་ཀྱིས་ཉིང་ཇེ་འཛིན་གྱི་ཕུང་པོར་བཤད་དོ། །གང་ཡང་ཡང་དག་པའི་ལྟ་བ་དང་། ཡང་དག་པའི་རྟོག་པ་དང་། ཡང་དག་པའི་ཚུལ་བཞི་བཅོམ་ཞུན་འདས་ཀྱིས་ཤེས་རབ་ཀྱི་ཕུང་པོར་བཤད་དོ། །

具寿ヴィーシャカよ。そ〔れら八支聖道〕のうち、正語・正業・正命は世尊によって戒蘊〔所撰〕と説かれた。また、正念・正定は世尊によって定蘊〔所撰〕と説かれた。また、正見・正思惟・正精進は慧蘊〔所撰〕と説かれた。

20) AKBh 55, 14-15

samyakdr̥ṣṭisaṃkalpavyāyāmāś ca prajñāskandha uktāḥ || na ca saṃkalpavyāyāmau prajñāsvabhāva tasyās tv anugūṇāv iti tācchabdham labhete |

「正見と〔正〕思惟と〔正〕勤とが、慧蘊である」と〔経典に〕説かれた。正思惟と〔正〕勤とは慧を自性としなが、それ（慧）に資する。故に〔二つは〕その（慧蘊）の名称を（tācchabdha）を得る。

21) MN 44 (Vol 1, 299-305).

箇所において「定蘊に三種」²²⁾と規定し、正精進は定蘊に摂められるとする。
すなわち、中央アジア写本と呼応する。

また、SauN 17.9では精進について次のように述べられる²³⁾。

ārabdhavīryasya manaḥśamāya bhūyas tu tasyākuśalo vitarkaḥ /

vyādhipraṇāśāya niviṣṭabuddher upadravo ghora ivājagāma // SauN 17.9

寂靜の為に、精進を獲得したとしても、彼の不善の尋はさらに〔ひどく〕
なった。

病を滅する為に、慧を向けた者の〔病の〕症状がひどくなった様に。

ここでは精進は寂靜 (śama) のために獲得するものであるのものであると
記される。そして、聖諦現觀の前段階として寂靜 (śama) が獲得される旨が
続く SauN 13. 19に説かれる。

sa duḥkhajālān mahato mukukṣur vimokṣamārgādhigame vivikṣuḥ /

panthānam āryaṃ paramaṃ didṛkṣuḥ śamaṃ yayau kiṃ cid upāttacakṣuḥ // SauN
17.13

彼（ナンダ）は巨大な苦の網より逃れんと願い、解脱道に入らんと願い、
最高の聖道（四諦）を見んと願い、獲得された〔智慧の〕目を有し、ある
奢摩他に至った。

このことから SauN 17.9で示された寂靜 (śama) とは涅槃などではなく、観
察の前提行としての寂、則ち奢摩他の事であり、定のことであると見做して問
題ないであろう。この点から SauN では本来、正精進は定を資するもの、定蘊

22) 『禅法要解』[T.15.294c09-10] 本文と訳については付録を参照。

23) 田中 [2019a] では、16章末尾の śānta に対する偈についても奢摩他に相当するものとし
て紹介したが、同年の仏教史学会の懇親会にて榎本文雄先生から śānta と śama を同一視す
ることは問題あるとご教示いただきました。それを受け、16章末尾を奢摩他とする理解は
撤回します。榎本文雄先生のご教示に感謝します。

所撰のものと考えられ、そのように構成されていたことがみてとれる。つまり、中央アジア写本や『禅法要解』の読みは SauN の文脈と呼応するものであるといえる。

以上のことから、中央アジア写本や『禅法要解』の読みこそが、本来の SauN の姿であり、ネパール写本は有部正統派の法相解釈、いわゆる「法施比丘尼経」に基づき「慧蘊は正見（慧）を自性とし、正思惟（尋）と正精進（勤）は正見に資するから慧蘊に摂められる」とする解釈²⁴⁾によって改定されている可能性が見いだせる。以上が田中〔2019a〕の分析の内容である。

さて、その上で、今回発見された『三啓集』所収の SauN を見てみたい。

まず、『三啓集』所収本の30偈では、「二種の慧であり、三種の寂静である。」とし、中央アジア写本や『禅法要解』と同様の構造を示す。

次に、『三啓集』所収本の32偈相当箇所²⁵⁾では、定蘊所撰に三種（念・三昧・精進）を想定し、中央アジア写本で Hartmann が想定した通りのサンスクリットが回収することができ、中央アジア写本との対応が見出すことができる。

また、続く『三啓集』所収本の33偈相当箇所では、慧蘊所撰に二種（正見・正思惟）を想定し、中央アジア写本では断片で欠損が多く判別しなかった箇所が「苦等の〔四〕諦に対する聖なる見、〔聖なる見で見られた〕そのおなじ〔四諦〕に対する正しく決定した思惟（satyeṣu duḥkhādiṣu dṛṣṭir ā[r]yā teṣv eva samyagniyato vitarkah）」であることが判明した。そして、この『三啓集』の読みは『禅法要解』の理解、「〔慧蘊とは〕四諦について慧は決定できること、これを正見という。正見に基づいて法に対する理解が生じること、これを正思惟という。（所謂於四諦中慧能決了。是名正見。隨正見覺法發起。是爲正思惟）」として、正見から正思惟が引き起こされるとする理解と対応する。つまり、中央アジア写本で確認できない箇所についても『禅法要解』と『三啓集』所収本で緊密な対応関係が見いだせるのである。

24) 前掲の AKBh. 55, 14-15や、『新婆沙』〔T.27.306b27-307b2〕等を参照。

25) 本偈のみ写本枠外に加筆されており、偈数が確実ではない。今は中央アジア写本から予想される偈数を示した。

以上、『三啓集』所収本の立場を確認したが、いずれも中央アジア写本や『禅法要解』に対応した。つまり、『三啓集』本の内容は中央アジア写本系のSauNこそがオリジナルに親しく、ネパール写本が特異であることを指摘する田中〔2019a〕の指摘を支持すると言えよう。

2.2.3. 30偈 c 句の主語の数

次に(II)「30偈 c 句の主語の数」に対する田中〔2019a〕の分析を確認したい。SauN 16. 30c 句はネパール写本と中央アジア写本で主語となる数が異なる。ネパール写本では単数であり、a 句の「道 (mārgaḥ)」を示しているように読み取れる。一方で、中央アジア写本では両数であり、道の有する 2 つの性質である「二種の慧 (prajñādvikarpaḥ)」と、「三種の寂静 ([praśamatrikalpaḥ])」の 2 つを示しているように読みとれる。この点については Hartmann〔1988, p. 69, fn. 3〕は、両数 (prajñā, praśama) とする中央アジア写本の読みのほうが簡潔であると指摘し、他の研究者もそれに追従し、思想的問題の有無については言及しない。たしかに、『禅法要解』の対応箇所でも Hartmann が想定したように「修行定慧」として両数が想定されており、Hartmann〔1988〕の想定は正しいものであろう。

当該箇所は一見すれば他愛もない異読である。しかし、この修習されるべきもの (bhāvanīy*) の内容は有部と経部で見解を異にする箇所であり、当該の異読は思想的問題に基づく読み替え、すなわち経部的要素の有部化とも見れる。

有部と経部では無表業を巡って大きく見解が異なる。入定者が備える徳目に戒蘊（無表業）が含まれるか否かについて、有部は無表業として戒蘊が含まれると主張する。その一方で、経部は「大分別六処法門 [AKUp 4006]」²⁶⁾ という経典において、「正語、正業、正命 (≡戒蘊)」が既に清淨となった行者が、そのうえで「正見・正思惟・正精進・正念・正定 (≡慧蘊・定蘊)」を修習する旨が述べられることを根拠として、戒蘊は入定前に有するのであって、入定中

26) Cf. 本庄〔2014b, pp. 517-519〕; 『雑阿含』三〇五 [T.2.87a-c]; MN 149 (Vol. III, 287-290) .

は含まれないと主張する²⁷⁾。すなわち、有部は道諦を八正道全てと理解し、経部は戒蘊の三支を除いた定蘊・慧蘊の五支と理解するのである。

以上のことをふまえて、あらためてネパール写本と中央アジア写本との違いを見てみれば、中央アジア写本において両数となっているのは定蘊・慧蘊の二つが意図されているからである。それは経部の主張とまったく同じである。そして、ネパール写本では道を示すのみで、八支とも五支とも取れるように曖昧化されているといえよう。つまり、SauN 16.30は中央アジア写本や『禅法要解』に見られる形こそが本来の形であり、経部の主張や、「大分別六処法門 [AKUp 4006]」の理解と対応するものであった。しかし、有部ではそのような解釈を認めなかったことから、ネパール写本に見られる形に改定を図った可能性が見いだせるのである。以上が田中 [2019a] の指摘である。

さて、続いて当該箇所『三啓集』所収本を見てみたい。当該箇所についても『三啓集』所収本は「両者 (tau; 慧と寂静) は規則通りに賢き者にして」として、中央アジア写本や『禅法要解』と同じく両数の形をとる。つまり、この

27) AKBh(IV) [196, 20-24]

asṭāṅgaś ca mārgo na syād avijñaptim antareṇa | samāpannasya samyagvākkarmāntājīvanām
ayogāt | yat tarhīdam uktam "tasyaivaṃ jānata evaṃ paśyataḥ samyagdr̥ṣṭir bhāvanāparipūriṃ
gacchati samyaksamkalpaḥ samyakvyāyāmaḥ samyaksmṛtiḥ samyaksamādhīḥ | pūrvam eva
cāsyā samyavākrmāntājīvāḥ pariśuddhā bhavanti paryavadātā" iti | laukikamārgavairāgyaṃ
pūrvakṛtam abhisamdhāyaitad uktam |

【有部】無表を除くと、道が八支ではなくなるであろう。入定者が有する、正語と〔正〕業と〔正〕命は不合理だからである。

【論駁者】そうであるならば、〔世尊はどうして〕次のように述べたのか。

「彼がそのように知りつつ、そのように見つちある限り、正見・正思惟・正精進・正念・正定は修習の満了に向かう。また、過去に、彼の正語・正業・正命は既に清浄となっており、既に潔白となっている ([AKUp 4006])」と。【有部：答】〔ここでは、〕世見道による離貪が過去に既に為されたものであると密意して、こ〔の教え〕は説かれたのである。

当該箇所の【論駁者】は上座（シュリーラータ）以前の経部師、おそらくは譬喩師の主張である。なぜならば、譬喩師は「大分別六処法門 [AKUp 4006]」を所依として四諦の自性を述べ、道諦を止観と定義することからである。一方でシュリーラータや世親は【論駁者】と異なり無表業を認めないまま八支が備わると主張する。そのため、当該の主張はシュリーラータとは異なる経部師の主張であると類推される。譬喩師の四諦説については田中 [2019b] において整理を行った。詳細はそちらを参照されたい。

点においても特異なのはネパール写本のみであり、中央アジア写本や『禅法要解』の理解が正しいものとする田中〔2019a〕の指摘を支持すると言えよう。

2.3. 小 結

以上、思想的背景の異なりに基づく異読の分析として、田中〔2019a〕における SauN 諸本の比較結果に対して、今回再発見された『三啓集』所収本がどのような立場を取るか確認した。異読点をまとめると次の通りである。

異読点	『三啓集』 本	ネパール写本	中央アジア写本	『禅法要解』
(I)正精進の位置付け	定蘊所撰	慧蘊所撰	定蘊所撰	定蘊所撰
(Ⅲ)30偈 c 句の主語の数	両数(定・慧)	単数(道)	両数(定・慧)	両数(定・慧)

異読から見いだせた結論を整理すると次の通りである。

1. 田中〔2019a〕では正精進の取扱を巡って、中央アジア写本では定蘊所撰とし、ネパール写本では慧蘊所撰とする差異が認められた。この点について、『禅法要解』は中央アジア写本に対応し、SauN の内容からしても定蘊所撰が適切であった。このことから中央アジア写本がオリジナルに近く、ネパール写本は有部の「法施比丘尼経」所説の法相に基づき内容の改定が加えられている可能性が見いだせた。
2. 田中〔2019a〕では、30偈 c 句の主語の数を巡って、中央アジア写本は両数であり、「道」の構成要素として慧蘊と定蘊の五支が意図されていたが、ネパール写本では単数となり道の内容は曖昧化していた。経部師は「[AKUp 4006]」に基づき中央アジア写本の両数を支持し、『禅法要解』もそれに対応した。その一方で有部は八支からなる道を意図し、両数には否定的であり、ネパール写本の理解と呼応した。このことからネパール写本が有部の法相理解に適うように改定が加えられている可能性が見いだせた。
3. 今回新たに発見された『三啓集』所収本 SauN は、SauN 諸本で問題のある異読である上記二点について、いずれも中央アジア写本や『禅法要

解』と対応し、ネパール写本と対応しなかった。このことは、中央アジア写本や『禅法要解』がオリジナルの SauN に近く、ネパール写本が特異なテキストであるという田中 [2019a] を支持する結果といえよう。

3. 結 論

本稿では、『三啓集』本 SauN の異読について分析を行った。その結果、思想的背景のない異読に関しては諸本のいずれかが常に正しいというわけではなく、いずれの諸本も一長一短あるものであった。その一方で思想的背景のある異読に関しては、『三啓集』本、中央アジア写本、『禅法要解』はそれぞれ対応関係にあり、ネパール写本のみが異なる性質を持っていることが明らかとなった。また、田中 [2019a] で指摘したように、その異なる性質は部派間の見解の相違に基づく可能性がある。

今までの仏典研究においては、経典のような著者性が無いものは特定の立場から加筆や増広や訂正が行われることは広く認められてきた。しかし、論書などの著者性があるテキストについては特定の立場から加筆や増広や訂正が行われることはあまり指摘されていない。

そのような中、岡野 [2018, pp. 24-26] は馬鳴に帰せられる『六道頌』について、本書は本来、五道説に基づく有部系文献であり、「天界節」中の阿修羅を説く一偈を「阿修羅節」として、一節に別立して、六道説を取る部派にふさわしい現在の『六道頌』となった可能性を指摘した。

そして、今回の道諦を巡る馬鳴詩についても、部派や学派間の見解の相違に由来するであろう異読が存在し、ネパール写本は有部の教学に相応しい形に改定が加えられた可能性が見いだせた。つまり、著者性があるテキストであっても経典のように、部派ごとに改定が行われている可能性が見いだせることとなる。

幸運なことにも『三啓集』にはこの他にも多数の SauN が収録されている。つまり、『三啓集』の再発見によって、今後はネパール写本 SauN の特異性を研究することができるようになるのではないだろうか。そして、それは著者

付録

ジョンストン本（ネパール写本）	中央アジア写本
<p>asyābhyupāyo 'dhigamāya mārgaḥ prajñātrikalpaḥ praśamadvikalpaḥ / sa bhāvanīyo vidhivad budhena śīle śucau tripramukhe sthitena // Saund_16.30 //</p> <p>そ〔の滅〕に至るものが、学習のための道である。（すなわち、）<u>（Ⅰ）三種の慧であり、二種の寂靜である。</u> <u>（Ⅱ）そ〔の道〕（sa）は規則通りに、賢き者（budha）にして、三面からなる清淨な戒に住する者によって修習されるべきである（bhāvanīyo）。</u></p>	<p>asyābhyupāyo 'dhiga(māya mārgaḥ prajñādvikalpaḥ) [p](ra)śamatrikalpaḥ tau bhāvanīyau vidhivad budh[e]na ś[ī]le śucau tripramukhe sthitena 30</p> <p>そ〔の滅〕に至るものが、学習のための道である。（すなわち、）<u>（Ⅰ）二種の慧であり、三種の寂靜である。</u><u>（Ⅱ）両者（tau; 慧と寂靜）は規則通りに賢き者にして、三面からなる清淨な戒に住する者によって修習されるべきである（bhāvanīyau）。</u></p>
<p>vākkarma samyak saha kāyākarma yathāvad ājīvanayaś ca śuddhaḥ / idaṃ trayam vṛttavidhau pravṛttaṃ śīlāśrayaṃ karmaparigrahāya // Saund_16.31 //</p> <p>正しい語業（正語）と、俱生の〔正しい〕身業（正業）と、正しく（yathāvat）、清らかな生活手段（正命）。これら三つは、行動規範に基づく活動であり、戒を所依とし、業の補助を結果する。</p>	<p>[v](ākkarma samyak saha)[kāya]karma yathāvad ājīvanayaś ca śuddhaḥ idaṃ traya[m] (vṛttavidhau pravṛttaṃ śīlāśrayaṃ ka)r[ma]parigra[hā](ya 31)</p> <p>正しい語業（正語）と、俱生の〔正しい〕身業（正業）と、正しく（yathāvat）、清らかな生活手段（正命）。これら三つは、行動規範に基づく活動であり、戒を所依とし、業の補助を結果する。</p>
<p>nyāyena satyādhigamāya yuktā samyak smṛtiḥ samyagatho samādhiḥ / idaṃ dvayaṃ yogavidhau pravṛttaṃ śamāśrayaṃ cittaparigrahāya // Saund_16.33 //</p> <p>理を用いて、〔四〕諦を学ぶために相応しい（yuktā）、正しい念（正念）と正しい三昧（正定）、 これら二つは、瑜伽の規範に基づく活動であり、寂靜を所依として、心の補助を結果する。</p>	<p>[nyā]yena satyādhiga(māya yuktā smṛ)tiḥ samādhiś ca parākrama(ś ca idaṃ trayam) yogavi[dhau pra]v[r]ttaṃ śamāś[r]ayaṃ ci[tt]a[parig[r]a[h]āya (32)</p> <p>理を用いて、〔四〕諦を学ぶために相応しい、正しい念と正しい三昧と正しい努力、これら三つは瑜伽の規範に基づく活動であり、寂靜を所依として、心の補助を結果する。</p>
<p>satyeṣu duḥkhādiṣu dṛṣṭir āryā samyag vitarkaś ca parākramaś ca / idaṃ trayam jñānavidhau pravṛttaṃ prajñāśrayaṃ kleśaparikṣayāya // Saund_16.32 //</p> <p>苦等の〔四〕諦に対する聖なる見（正見）と、正しい、考察（正思惟）と、努力（正精進）。これら三つは智の規範に基づく活動であり、慧（prajñā）を所依とし、煩惱の滅尽を結果する。</p>	<p>(sa)tyeṣ(u duḥkhādiṣu dṛṣṭir āryā samyagvitarkaś ca ~~~~ x idaṃ dvayaṃ jñānaviddhau pravṛttaṃ prajñāśrayaṃ lkeśaparikṣayāya 33)</p> <p>〔* 苦等の四〕諦に対する 〔* 聖なる見と、正しい考察。 これら二つは智の規範に基づく活動であり、慧を所依とし、煩惱の滅尽を結果する〕。</p>

※偈頌の順序については中央アジア写本に準拠して整理した。

『禅法要解』 [T. 15. 294c10-24]	『三啓集』 所収本
<p>得涅槃方便道。定分有三種。慧分有二種。 戒分有三種。住是戒中修行定慧。 涅槃を獲得する方法である（八聖）道は、 (I)定蘊として三種有り、慧蘊として二種有 り、戒蘊として三種有る。(II)この戒の中に 住まい、定と慧を修行する。</p>	<p>asyābyupāyo 'dhigamāya mārggaḥ {} prajñā[ā]○(d)vikalpa{h} praśama{s?}trikalpaḥ tau bhāvanīyāu vidhivad budhena śīle śucau tripramukhe sthitena (SauN.16.30) そ〔の滅〕に至るものが、学習のための道 である。〔すなわち、〕 (I) 二種の慧であり、 三種の寂靜である。(II) 両者 (tau; 慧と 寂靜) は規則通りに賢き者にして、w三面 からなる清淨な戒に住する者によって修習 されるべきである (bhāvanīyau)。</p>
<p>正語正業正命。是名戒分三種。 正語、正業、正命これらを戒蘊の三種とい う。</p>	<p>vākkamma samya○k sahaḥāyakamma yathāvad ā[jī]vanayaś ca śuddaḥ idaṃ tra[ya]ṃ vṛt(t)ividhau pravṛttam* ś[ī]lāśrayam* karmmapari[97b3]grahāya (SauN.16.31) 正しい語業（正語）と、俱生の〔正しい〕 身業（正業）と、正しく (yathāvat)、清ら かな生活手段（正命）。これら三つは、行 動規範に基づく活動であり、戒を所依とし、 業の補助を結果する。</p>
<p>正定正念正精進。是名定分三種。 正定、正念、正精進、これらを定蘊の三種 という。</p>	<p>nyāyena satyādhigamāya yuktāḥ smṛtiḥ samādhiś ca parākramaś ca () idaṃ trayam [yoga]vidhau pravṛttam <MS. praddiṣṭam> śamāśrayam cittaparigrahāya ()(SauN.16.32 ?) 理を用いて、(四) 諦を学ぶために相応し い、正しい念と正しい三昧と正しい努力、 これら三つは瑜伽の規範に基づく活動であ り、寂靜を所依として、心の補助を結果する。</p>
<p>所謂於四諦中慧能決了。是名正見。隨正見 覺法發起。是爲正思惟。是名慧分二種。 すなわち、(慧蘊とは) 四諦について慧は 決定できること、これを正見という。正見 に基づいて法に対する理解が生じること、 これを正思惟という。これら（正見と正思 惟）を慧蘊の二種という。</p>	<p>satyeṣu duḥkhādiṣu dṛṣṭir ā[r]yā<MS. ādyā> teṣv eva samyagniyato vitarkaḥ idaṃ dvayam jñānavidhau {jñā}○{na vidhau} pravṛttam* prajñāśrayam kleśaparikṣayāya (SauN.16.33 ?) 苦等の(四) 諦に対する聖なる見、(聖な る見で見られた) そのおなじ(四諦) に対 する正しく決定した思惟。 この二つは、智慧の規範に基づく活動であ り、煩惱を完全に滅する為の慧の所依である。</p>

性を有するテキストに対する我々の考え方を転換させるものとなるのではないだろうか。

Abbreviation

AKBh: *Abhidharma Kośabhāṣya of Vasubandhu*. Ed. P. Pradhan. Patna: K. P. Jayaswal Reserch Institute, 1967.

AKUp: **Abhidharmakośabhāṣyaṭīkā Upāyikā*

AKVy: U. Wogihara ed., *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra*, 山喜房佛書林, 1971 (復刻).

SauN *Saundarananda*,

T. 『大正新脩大藏經』

H. Hartmann[1988]

J. Johnston[1928]

Bibliography

Choi, Jin kyoung [2010] “The Eightfold Path in Aśvaghōṣa’s Saundarananda” The Bukkyo University Graduate School review, 38. pp. 31–38.

Johnston, E. H.[1928] *The Saundarananda of Aśvaghōṣa critically edited with notes*. Oxford University Press.

Hartmann, Jens-Uwe[1988] “Neue Aśvaghōṣa- und Mātrceṭa-Fragmente aus Ostturkistan.” *Nachrichten von der Akademie der Wissenschaften in Göttingen*. 2 : 55–92.

Salomon, Richard[1999] “Aśvaghōṣa in Central Asia: Some Comments on the Recensional History of His Works in Light of Recent Manuscript Discoveries.” *Buddhism Across Boundaries*., pp. 219–263.

上野牧生 [2015] 「アシュヴァゴーシャの失われた莊嚴經論」『インド論理学研究』第 VIII 号 松田和信教授還暦記念号 pp.203–234.

岡野 潔 [2018] 「六道頌 (Ṣaḍgatikārikāḥ) の研究—梵藏漢巴 対象テキスト—」『南アジア古典学』13w, pp. 1–164.

加藤純章 [1989] 『経量部の研究』、春秋社。

菅野竜清 [1994] 「大智度論における馬鳴著作の引用について」『印度学仏教学研究』通号86号 pp. 194–197.

菅野竜清 [1995] 「大智度論における禅波羅蜜義について」『宗教研究』通号303号 pp. 244–245(R)

菅野竜清 [1998] 「大莊嚴論訳者再考」『印度学仏教学研究』通号93号 pp. 79–82

菅野竜清 [2002] 「鳩摩羅什訳禅経類について」『仏教学仏教史論集：佐々木孝憲博士古稀記念論集』 pp. 77–90

三啓集に収められたサウンドラナンドの異読について

- 金倉圓照 [1966] 『馬鳴の研究』、平樂寺書店。
- 櫻部 建 [1969] 『俱舍論の研究：界・根品』、法蔵館。
- 櫻部 建・小谷信千代・本庄良文 [2004] 『俱舍論の原典研究 智品・定品』、大蔵出版。
- 田中裕成 [2015] 「『坐禅三昧経』における出世間道」『佛教大学仏教学会紀要』 佛教大学、20号, pp. 125-146,
- 田中裕成 [2019a] 「『サウンドラナンド』 16.30-33にみる二つの系統」『印度學佛教學研究』 67(2), pp. 999-994.
- 田中裕成 [2019b] 「《婆沙論》における阿毘達磨論師と分別論師と譬喩師の四諦説」『佛教大学大学院紀要』 47, pp. 33-47.
- 田中裕成 [2019c] 「アシュヴァゴーシャと医師チャラカ」『佛教論叢』 63, pp. 9-16.
- 田中裕成 [2019d] 「『禅法要解』に組み込まれた『サウンドラナンド』の四諦説」、『佛教大学仏教学会紀要』 24号, pp. 81-94.
- 福原亮巖 [1972] 『四諦論の研究 仏陀根本教説への智慧』、永田文昌堂。
- 本庄良文 [1987] 「馬鳴詩のなかの経部説」、『印仏研』 通号71号 pp. 87-92(L)
- 本庄良文 [1993] 「馬鳴の学派に関する先行学説の吟味」、『原始仏教と大乘仏教：渡辺文麿博士追悼記念論集』 pp. 27-44.
- 本庄良文 [2014a] 『俱舍論註ウパーイカーの研究 訳註篇 上』 大蔵出版.
- 本庄良文 [2014b] 『俱舍論註ウパーイカーの研究 訳註篇 下』 大蔵出版.
- 松田和信 [2019] 「三啓集 (*Tridaṇḍamālā*) における勝義空経とブッダチャリタ」『印度学仏教学研究』 68(1), pp. 1-11.
- 松濤誠廉 [1954] 「瑜伽行派の祖としての馬鳴」、『大正大學研究紀要文學部・佛教學部』 39, pp. 191-224.
- 松濤誠廉 [1981] 『馬鳴端正なる難陀』、山喜房仏書林。
- 水野弘元 [1931] 「譬喩師と成実論」『駒沢大学仏教学会年報』 通号1, pp. 134-156.
- 宮本正尊 [1929] 「譬喩者、大徳法救、童受、喩鬘論の研究」『日本仏教学協会年報』 通号1, pp. 117-192.